

平成 22 年 1 1 月

[配布先：全組合員]

市場情報

<各地区市場動向>

北海道

建設の大飢饉—強力な景気・雇用対策を切望—

大雪山から始まった紅葉前線は札幌へも移動し、紺碧の空に素晴らしい色合いを見せている。まさに芸術作品の映えでスポーツや行楽、そして農作物の収穫と、いつもの秋の風景を醸し出している。

これに対し鉄鋼業界の様相は、米櫃ともいふべき建設関連の需要環境は、想定以上に厳しく過去にない大飢饉を余儀なくされており、蓄えのないまま厳冬を迎えようとしている。

建築着工統計から推測する 2010 年 1～8 月の鉄骨数量は、累計 74,000 トンで、前年同期比 9.7% 減少した。

同需要の先行きを示す北海道機械工業会鉄骨部会道央支部の積算数量は、85,266 トンで、前年実績に比べ 15.6% 上回った。しかし、大型物件の始動は大幅に遅れ、来春以降にズレ込んでおり、慢性的な物件不足に陥っている。冬に向かい中小ファブほど深刻な状態とされ、経営環境も一段と厳しさを増しているようで憂慮されている。

橋梁分野は、これまでの発注量が前年度比 47.4% 減と大幅な落ち込みを見せている。また、発注遅れに伴い受注先は、一部の大手橋梁メーカーに偏っている模様。中小メーカーは、耐震対策や維持補修・補強材向けの落橋防止工事などの早期発注を切に望んでいる。

以上のように道内における切板需要の中心である建築鉄骨や鋼橋梁が大幅に減少。今年の場合、需要最盛期となるべき夏から冬場にかけての盛り上がりがさっぱりで、切板メーカー各社の供給能力を満たすには程遠い低操業を強いられている。

つれて切板価格は、見積もり物件が少なく低迷している。ゼネコン筋の過当競争の激化と、鉄骨単価の抑制による採算割れが影響している。このような状況下、一部大型工事に電炉材の使用容認の動きも見られている。また、トレーサビリティが厳格に要求される

工事についても、高炉材の加工条件のもと電炉材並み、あるいは本州地域の低い価格に抑えられる傾向となっている。需要不振と採算ラインを下回る二重苦の切板の受注価格は、さらに悪化も予想されるだけに深刻な事態といえる。

景気がさらに悪化する「二番底」への警戒感が広がるなか、年末に向け企業倒産の増加が懸念され、長期にわたる公共事業の縮減と、少ない物件受注の過当競争。加えて、民間建築投資についても大幅に遅延気味。従って、疲弊著しい地方に対し、声を大にして「景気と雇用」を最優先した強力な政策推進を求めている。（玉造・西村孝治）

東 京

上 期 を 凌 い で の 雑 感

「暑さ寒さも彼岸まで」と云う語源を体感・実感した年は今年がはじめてでした。

9/22までは真夏日、秋分の日は一転して涼しくなり、24日からの風は秋そのものでした。温度差も10度ほどあったと記憶していますが、異常気象と云われているなかでも、これほど見事に季節を切替えた自然の力というものは凄いものだと思います。

温度差と云えば、この環境下にも拘わらず、雇用を優先することで国内の景気を浮揚させるべきだと手順前後も甚だしい（私は素人ですが）人がトップにいるようですが、この温度差は一体どこからくるのでしょうか。どうしたら縮められるのでしょうか。「混乱させてごめんなさい」と簡単にやめた首相、「次は俺の番だ」の総裁選、といった政治ショーばかりを見せられて、肝心の経済対策はそっちのけでは溝が埋まる筈がありません。

そんなやるせない状況下ですが、関東地区の建材シャー5社の上期加工数量が出揃いました。

全体では昨年度の上期比17.9%減となり、橋梁は50.5%の激減、鉄骨は10.7%増、その他分野は19.9%増となりました。橋梁の落ち込みが激しく、下期の挽回も期待できない状況から、今年度は恐ろしい数字を覚悟しなければならない状況となっています。

足元は鉄骨案件が入り組んだ状態ですが、今年いっぱいとの情報もあり、瞬間的な繁忙とみているので、橋梁落ちこみ分のカバーまでは期待できません。橋梁切板は08年度が6.7万T、09年度は5.1万Tと年々落ちていますが、シャー業界だけでは手の打ちようがありません。

国内の主要なメタル橋は60年代の架設も多くあり、補修、補強だけで事足りるのでしょうか。早急な架替えが必要な橋も、「公共事業なんか反対」と言っていれば済むのでし

ようか。

元気が出るような情報を求めて、お客様に顔を出すのですが、行く先々が暗く、帰社する頃には、暗い話題や閉塞感にすっかり包まれて、帰ってくる毎日です。

愚痴ばかり言ってもはじまらないのですが、この現状を打開するべく、納税者の期待に応える緊急経済対策を一刻も早く実行して欲しいと切に願っている今日この頃です。

(青柳鋼材興業・渋谷三男)

東 海

超円高を受け・・・

10月も日を増す毎に円高が急加速し、中部圏の産業界に閉塞感が漂っている。

9月まで、しばらくは円高の影響はあったものの、海外向けの受注があり、景気が悪いなりにあるところには仕事があるという雰囲気があった。

仕事の中身はというと、依然にも増して短納期が当たり前になり、仕事の継続性もあやふやで、目先をいかに埋めていくかが課題であり、仕事を埋めるために、安値受注も止むを得ないという雰囲気になっている。見積もりも物件対応で仕事を確実に取ろうという値段になり、採算性は二の次だ。

そんな中、トヨタ自動車が「カローラ」の生産を海外に移管するという話が出て、空気が澁み、円高も80円を切るかというニュースが流れたとたん、仕事量がパタリと止まってしまった。

色々な噂が流れ始め、廃業する先がありそうだという話も耳に入ってきたりして、11月以降全く先が見えない状況である。

(信正鋼材・牧野泰明)

市場委員会の次回開催予定

第147回市場委員会

12月10日(金) 正午～

於 東京・「鉄鋼会館」